

萬龜

特別号

No.3

檀信凌会館
文由閣



「いま」の生き方を問う

東長寺は、いつもその時代の「いま」の生き方を問うてきました。

家族のあり方が変わり、核家族の暮らしに慣れた九〇年代。

個人のあり方を問いました。ひとつの答えが、供養の姿。

家族が守る墓だけではなく、個人の永代供養のあり方を示しました。

思いがけず世界が身近につながっていることがわかってきた二〇〇〇年代。

祈りは、広く人類の間で交わるべきであることを示しました。

個人が、血縁、地縁を超えてつながりをもつ、無縁の縁を結ぶ意味が、ここにあります。

二〇一二年。日本に大きな出来事が起こります。東日本大震災です。

国をあげて一瞬手を止めて、そして誰もが考えました。今のままでいいのだろうか？

意識の何かが変わり始めて、ある問いが頭をよぎります。

次の世代に、何かを渡さなければならないのではないか？

振り返ればこれまでは、他人のことにかまっていられなかった成長の時代だったのかもしれませんが。

しかし今、私たちは、生きる力を次の世代へ、別の地域へ伝えてゆく、

ひとつの循環が大切であることに気付いているのではないのでしょうか。

それがまた、自分に還^えってくることを。

——それは、未来への回向^{えこう}という姿。

東長寺は文由閣と新たな縁の会の仕組みを立ち上げます。その背景には、

伝統を活かし、次世代の文化を創造する文化支援、

他の地域との循環をはかる地方寺支援、

の意味があります。未来への回向の、ひとつの取り組みです。

文禄三（五九四年）

熊谷の東竹院第四世、雪庭春積和尚により開創。

平成元（一九八九年）

開創四百周年記念事業として現伽藍を建立。

現代の都市寺院のあるべき姿、新しい価値を示す。

平成八（一九九六年）

東長寺縁の会を発足・羅漢堂の立ち上げ

開創四百周年記念事業の一環として、永代供養付き生前個人墓「縁の会」を発足。個人の永代供養の新たなあり方を示すとともに、縁の会の納骨堂「羅漢堂」の募集を開始。

平成十三（二〇〇二年）

多宝塔の立ち上げ

同年に起きたアメリカ同時多発テロ事件を受け、分骨し二部を合祀することで、個人を超えた「無縁の縁」を結ぶ供養のあり方を示すとともに、合葬墓「多宝塔」を立ち上げ、平成十八年より「千手堂」の募集を開始。

平成二十七（二〇一五年）

文由閣建立・新縁の会の立ち上げ

新たな活動拠点となる檀信徒会館「文由閣」の建立とともに新たな縁の会の仕組みを立ち上げる。



いまを生きる私たちの想いの循環に向けて

- 次世代の文化を創造する文化支援
- 都市と地域との循環をはかる地方寺支援

伝統文化を
受け継ぎ、
次世代の文化を
創造する



循環する「縁」の
創造へ向けた地方寺支援

未来に回向する

え
こ
う



もくじ

- 04 住職挨拶 人々がつエネルギーの循環に向けて
- 07 新堂・文由閣 伽藍配置
慈嶽堂／龍樹堂
- 13 文由閣の仏像
阿彌陀如来像／地藏菩薩像
- 14 文由閣の仏具・装飾
別府竹細工「慈嶽堂天蓋」／輪島塗「厨子・位牌壇」
高岡銅器「五具足・銘板・堂名板・鑿子」
- 20 新堂文由閣建立に向けて 仁王葉子
- 21 東長寺新収の平安時代の仏像について 山本勉
- 22 東長寺四百二十年の歴史(二)
- 24 檀信徒会館「文由閣」建築設計について「Ⅲ」
- 26 檀信徒会館「文由閣」工事の進捗状況
- 27 檀家・縁の会会員の居住地マップ
「神奈川県・埼玉県・千葉県」
- 30 行持案内(平成二十六年十二月～平成二十七年三月)
- 34 新縁の会のご案内

住職挨拶 人々がもつエネルギーの循環に向けて

年の瀬を迎え、本年の出来事をさまざまに振り返っているところです。この春、震災から三年を経て三陸鉄道が全線で運転を再開したことは大変喜ばしく、復興の兆しを見ることができたのではないのでしょうか。一方、御嶽山の噴火や度重なる大雨台風には、自然への畏敬の念を常に忘れてはならないことを再認識させられました。お亡くなりになられた方々のご冥福を心よりお祈り致します。

いよいよ、御寄進が始まりました。わずか一カ月あまりで一五〇〇名を超える縁の会会員の皆さまより御支援を頂きましたことは、誠に心強く、有り難く感謝申し上げます。御寄進頂いた皆さまのお名前は、山内芳名板に掲示し、永劫に寺史芳名帳に記録させて頂きました。御寄進をお願いするにあたり、「文由閣」の建築詳細をはじめ、今後展開するさまざまな活動について五度の説明会を開催させて頂きましたが、各回ともご好意あるご発言を頂戴致しました。皆さまから頂きました励ましのお言葉を糧に、今後とも精進して参ります。新堂建立は僧侶にとって一生に一度あるかないかの有難いご縁でございます。現東長寺伽藍が建立されたのが二十六年前、先代和夫大和尚はその機を境に東長寺住職に任命されました。先代が歩んだ足跡を辿るように、私も同じく、住職就任の機に新堂建立の任を授かせて頂くこととなりました。それには、まさに運命むしろ宿命のようなものを感じております。先代も私も同じく三十半ばでの大事業、どのような思いで取り組んだのか知る由もありませんが、この試練の中で、先代の教えを受け取れるような予感が致します。



このような機会に恵まれましたことは、檀信徒の皆さまのご理解ご協力の賜物と、重ね重ね御礼申し上げます。

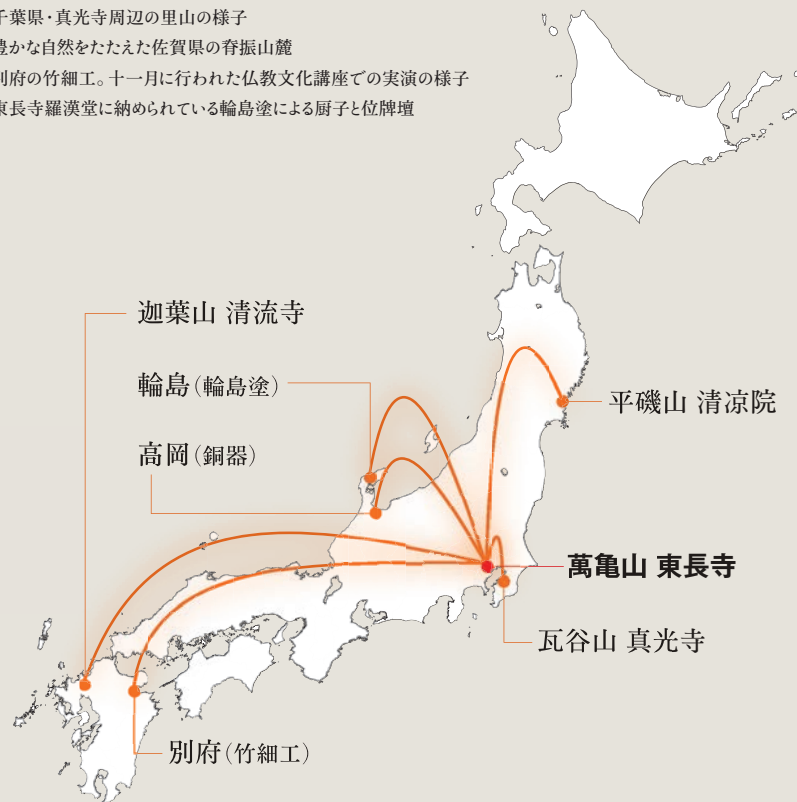
さて、十月から十二月までの三回にわたる仏教文化講座では、新堂「文由閣」の仏具制作を担当する各地伝統工芸師をお招きし、対談形式で開催致しました。各地の伝統工芸の再生を願い、既存の仏具屋に注文するのではなく、実際に現地の作家と話し合いを続けながら仏具の製作を依頼しました。人の手が生み出す表現には、人を動かすエネルギー（感動）がある、と私は信じています。先人たちの知

[写真提供]

真光寺：写真1 | 霜田亮祐：写真2 | フリックスタジオ：写真3 | 輪島屋善仁：写真4



- 1 千葉県・真光寺周辺の里山の様子
- 2 豊かな自然をたたえた佐賀県の脊振山麓
- 3 別府の竹細工。十一月に行われた仏教文化講座での実演の様子
- 4 東長寺羅漢堂に納められている輪島塗による厨子と位牌壇



恵によつて培い伝えられてきたものに、さらなる価値や解釈を明らかにし、革新的な表現に挑戦し続けること。これこそ本当の意味での伝統だと強い信念をもっていらっしゃる方々とお話させて頂き、大変刺激になりました。我々宗門も伝統を継承していく立場である点では同様であり、伝統とは時代に応じた革新的な試みを重ねてきた故に今も残されているのだと確信致しました。分野は違っても、一緒に文化を耕していきたいとさらに気概が強まったところです。

現在、各地の伝統工芸および地方の自然環境は衰退の一途を辿っております。東長寺は、その土地がもつ時の流れや空間性に焦点を当て、今後積極的に関文化および地方の支援活動を行って参ります。人々がもつエネルギーを、失われゆく文化や自然環境の再生へと循環的に結んでいくことが、私たちの使命だと考えております。まずは別府・輪島・高岡といった各地の伝統文化の保全活動をはじめ、千葉・佐賀・気仙沼といった各地方寺と協働し、里山の再生、脊振の森づくり、被災地復興などの自然環境保全活動を通して各地の風土のあり方を継承転回していきたいと思っております。東長寺は仏法の教えを紐解きつつ、常に新たな価値観を提案して参ります。

住職になって初めて迎える年越しです。大晦日には歳末法要がございます。除夜の鐘を搦き、皆さまと一緒に新年をお祝いしたいと存じます。山内一同、皆さまのご参詣を心よりお待ちしております。

合掌

東長寺住職

瀧澤遥風



五階・慈嶽堂に安置される阿弥陀如来像。土台と後光を表す光背は、世界遺産の中尊寺(岩手県)の本堂・本尊の製作総指揮を務めた京都の吉田源之丞老舗にて製作が進められている。[写真:海野樫世]

新堂・文由閣 伽藍配置

ぶんゆうかく

東長寺では二〇一五年五月、新堂である文由閣が竣工します。法要を行う法堂と納骨堂が、階を重ねて配置される多層建築です。

その名には「文化」の「由縁」となるべく想いが込められました。それは先人たちが築いた文化を、今の時代に活かし、未来へつなげてゆくと。私たちは伝統文化を「未来へ回向」してゆかねばなりません。文由閣はそのひとつの場となります。

文由閣の建築、内装、仏具はいくつもの革新から生まれています。それは今の時代だからこそなし得る文化であり、ここはそれを体感できる場所なのです。

五階 | 慈嶽堂(法堂)

最上階は、法要を営む文由閣の本堂です。東長三十三世重興慈嶽和夫大和尚の想いを継ぐべく「慈嶽堂」と名付けられました。本尊として、平安時代後期に製作された阿弥陀如来をお祀り致します。日中は、檀家、縁の会を問わず故人のご法事をおつとめ致します。また、朝のつとめ(朝課)と夕べのつとめ(晩課)、早朝坐禅会の実施とともに、阿弥陀^{ふだん}諷経や地蔵諷経などの本尊諷経および先住忌、龍樹諷経などの特別法要を行う予定です。檀信徒の皆さまのみならず、広く一般の方にも参加して頂けますので、皆さまをお誘い合わせの上、ご来山下さい。

四階 | 龍樹堂(納骨堂)

納骨堂となる四階は、本年逝去した本間龍二へ頂いた皆さまの想いを受け継ぎ「龍樹堂」と名付けました。お堂の中心には「大地」や「体内」を意味する地蔵菩薩をお祀りします。上階にお祀りした極楽浄土の教主・阿弥陀如来、大地を意味する地蔵菩薩。天と地の間に位置するこの階に皆さまの足跡を記憶する位牌壇を配し、ご位牌を安置致します。

三階 | 講堂

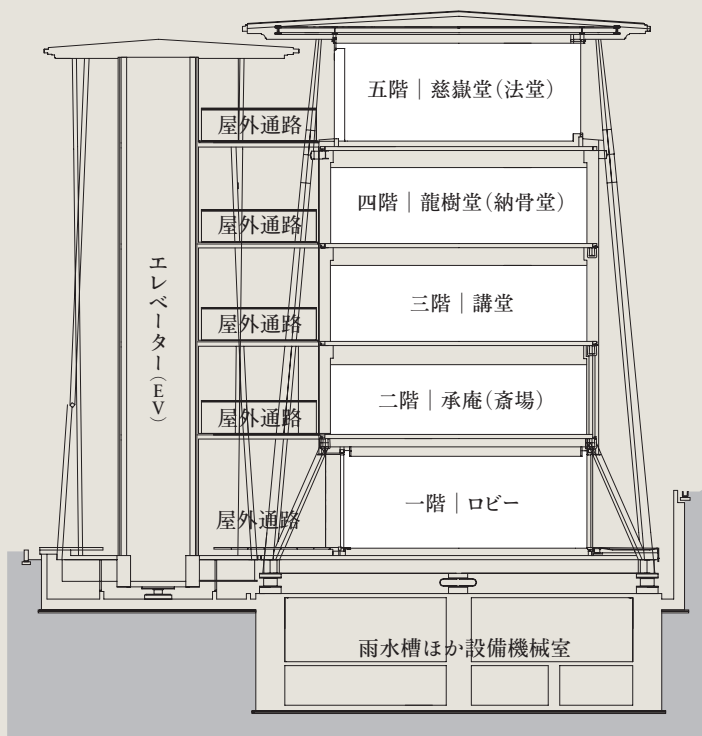
文由閣の中層である三階は、文由閣の文化発信拠点となる講堂です。講演会や展示会など、檀信徒の皆さまや一般の方にも参加頂ける行事を執り行なって参ります。

二階 | 承庵(斎場)

檀信徒の皆さまのご葬儀をおつとめさせて頂く葬祭の場です。故人の想いを受け継ぐ場として「承庵」と名付けました。「承庵」の「承」の字には、前のものを受け継ぐという意味があります。葬祭は故人との最後のお別れの場ですが、命は亡くなくても「生」は決して消滅しません。その生を受け継ぎ、想いを継承する場となるようおつとめさせて頂きます。

一階 | ロビー

全面ガラス張りの空間を彩る竹の天蓋、外に広がる水盤。新縁の会入会のご案内や、すでにご入会の方のご相談、またお参りの方の喫茶スペースとしてご利用頂けます。



文化の由縁となる新堂

東長寺は、新しい伝統文化を体現する場をつくります。

慈嶽堂

じがくどう

文由閣五階

先代住職・慈嶽和夫の名に由来する、新しい法堂

東長三十三世重興慈嶽和夫大和尚の想いをつなぐべく建立された文由閣の最上階は「慈嶽堂」と名付けられました。ここは半面がガラス壁で囲われた、他に類を見ない開放的で優美な本堂となります。さまざまな法要の場であり、檀信徒の皆さまのご法事、坐禅会、諸宗教活動の場として利用致します。

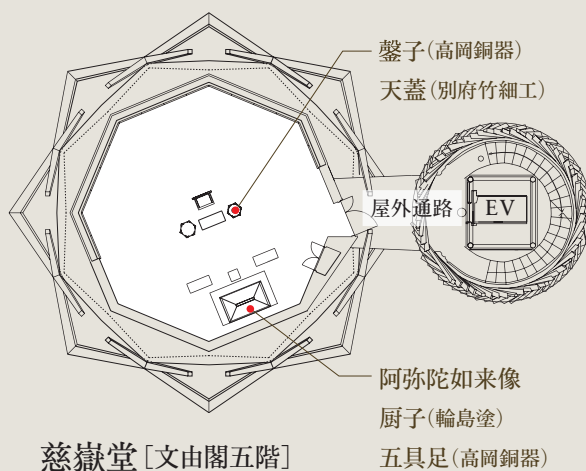
慈嶽和夫大和尚は縁の会を創設し、全国に先駆けて永代供養をお約束する個人墓を実現しました。その時代と社会情勢に呼応した宗教のあり方を求め、実践してきました。それは寺院のつくり方にも現れていました。日本仏教の伝統様式を現代技術によって形にできた羅漢堂の壮大な位牌壇や、水の苑の壁画などにその精神が見て取れます。

この精神を受け継ぎ、今の時代を見据え、先祖から受け継いだものを未来へ回向する姿勢を貫こうとしているのが文由閣です。その本堂である慈嶽堂は、伝統文化が今の時代に生きている様をあらゆる人に体感して頂こうとする空間でもあります。

平安時代末期の阿弥陀如来像／輪島塗の厨子



慈嶽堂では阿弥陀如来を本尊としてお祀り致します。この阿弥陀如来像は米国に流出していた、平安時代末期の作品です。穏やかで優しい面貌はこの年代の特徴で、対面する人の心を動かす力があります。先祖が生み出したこの文化を、流出させることなく次の世代に伝えてゆきます。光背と台座は、戦国時代より仏具の製作を続けてきた吉田源之丞老舗よしだげんのじょうによって、仏像を安置する厨子わじまやぜんは、かつて羅漢堂の位牌壇を手がけた「輪島屋善仁」の漆工芸によるものです。



慈嶽堂〔文由閣五階〕

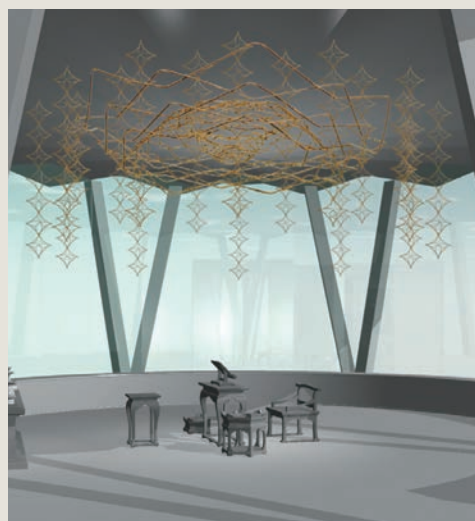


五具足には、これも伝統工芸品に指定されている高岡銅器を納めます。着色技術の伝統工房「モメントムファクトリー・O.N.I.」による新たな試みが展開されます。また鑿子^{けいす}は、国内で数名しかつくり手がいないとされる鍛造^{かんそう}（金属を叩き延ばして成形する手法）でつくられるもので、曹洞宗の両大本山「永平寺」と「總持寺」に納めている「シマタニ昇龍工房^{しょうりゅう}」によるものです。鍛造ならばこそ微細な音を調整することが可能となり、完璧な音色を奏でる作品です。

高岡銅器の五具足と鑿子

活きた伝統文化を体感して 未来へつなぐ場所

別府竹細工の天蓋



天蓋には別府の竹細工職人による作品を用います。別府竹細工は国指定の伝統工芸品でもあります。籠の製作から始まった別府竹細工は、細く割った竹をさまざまな手法で編み込むもので、繊細なディテール、大胆な造形、経年変化を楽しむ工芸です。この度、慈嶽堂に納めます天蓋は、竹細工としては最大級のもので、これが寺院の天蓋に使用されることは、おそらく日本初の試みとなります。

龍樹堂

りゅうじゅどう

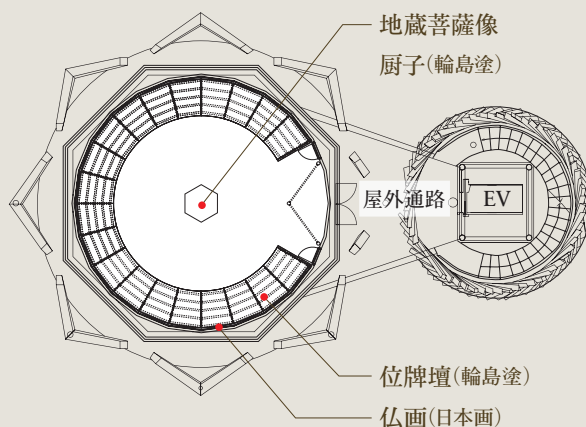
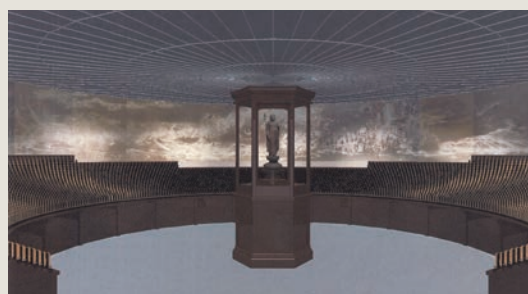
文由閣四階

縁を説いた龍樹菩薩と、縁を結んだ大孫龍樹・本間龍二に由来する納骨堂

お釈迦さまの十四代目の弟子さまにナーガルジュナという僧侶がいました。通称「龍樹菩薩」と呼ばれ、日本の仏教の根底となる大乘仏教を体系化したといわれる人物です。お釈迦さまの教えから、空や縁起といった概念を導き、『中論』という書物を残しています。中論は仏教史上最も重要な教えのひとつで、般若心経の土台となりました。文由閣四階は、この龍樹菩薩の名を冠した納骨堂となります。壁面に沿って円形に配置された位牌壇に囲まれた、静謐な空間。ここに新縁の会会員の位牌が納められます。

縁を説いたのが龍樹菩薩なら、縁を結んだのが本間龍二。本年二月に亡くなった縁の会事務局員であり、奇しくも先代住職より龍樹の二字を込めた戒名「大孫龍樹信士」を授かっておりました。彼もまた龍樹と呼ばれます。その意を汲むように、本間龍二は縁の会創立当初より多くのご縁を結びました。まさに仏弟子として龍樹の名にふさわしい功績を残し、四十九日の折には皆さまより千本を超える塔婆が寄せられました。功德を回り得て、未来に回向してゆく新たな縁の会の充実を、龍樹信士は祈念し続けてくれるでしょう。

上階にお祀りした極楽浄土を表す「阿弥陀如来」に対して、龍樹堂中央には「地蔵菩薩」をお祀りし、これを位牌壇が丸く囲います。地蔵とは大地の命を育むもので「地」を表象するもの。上階を「天」と仰ぎ、「地」との間に位牌壇が位置することになります。天と地の間の存在こそ「人間」の語源ともいわれ、龍樹堂はこれを表した空間でもあります。



龍樹堂〔文由閣四階〕

平安時代後期の地蔵菩薩像 輪島塗の厨子



未来への回向につながる、祈りの空間

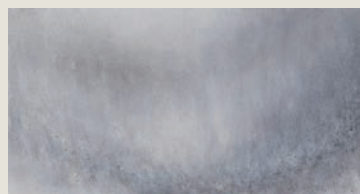
壁面を飾る仏画

龍樹堂の周囲には仏画の壁面が連なりま
す。製作は日本画作家の大船真言さん。
須弥山のごとく起伏をはらんだ位牌壇の山
の向こうに無限に広がる風景が、この仏画に
よって生まれます。それはひとつの景色に佇み
ながら、ある観念を身体で感じられる絵画
であります。

画のモチーフは万物の要素とされる五
大——地、水、火、風、空。これら自然の構成
要素が、この地上でさまざまな振るまいを
見せるその様を、自然の「態」といべきもの
を表します。人はその自然の態に共鳴する
生き物です。龍樹堂は、ここに居合わせるす
べての人にその共鳴を体感して頂く空間で
す。また、この画には天然の鉱物を砕いて生
成した岩絵の具が用いられており、その一粒
一粒に実際の地球の歴史・記憶が刻まれて
いる仏画なのです。



「WAVE#80-silence-」岩絵具・顔料・麻紙、2009

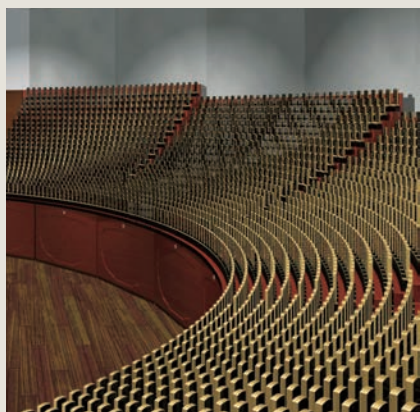


「WAVE#90」岩絵具・顔料・麻紙、2012

龍樹堂では地藏菩薩をお祀り致します。この地藏菩薩像は慈嶽堂
の阿弥陀如来像同様、米国に流出していた平安時代後期の作品で
す。穏やかで優しい面貌はこの年代の特徴ですが、特にこの菩薩像
は気持ちいがほぐれる柔和なお顔が拝されます。先祖が生み出した
この文化を、流出させることなく次の世代に伝えてゆきます。仏像
を安置する厨子は、慈嶽堂同様、「輪島屋善仁」による漆工芸です。

輪島塗の位牌壇

壁面に沿って円形に配置される位牌壇もまた、輪島塗で製作されま
す。輪島塗では元来食器などの手のひらサイズのものがつくられてき
ましたが、ここに羅漢堂の位牌壇同様に最大級の漆作品が納められ
ます。CGを製作した上での
漆塗りという新しい技術が採
用されており、そこには輪島塗
の歴史にはなかった挑戦があ
ります。これはまさに文化の
回向といえます。東長寺はこ
れに共鳴し、文化支援活動の
一環として、このすばらしい文
化を後生に残してゆきます。





四階・龍樹堂に安置される地藏菩薩像。
柔和な表情と力強い立ち姿。位牌壇を
見渡す、お堂中央のガラス張りの厨子に
入る。〔写真：海野煌世 (p.13 含む)〕

文由閣の仏像

ニューヨークに流出していた仏像が、再び国内に還ってきました。

文由閣の仏像はいずれも平安時代後期につくられ、その後、米国へ流出しておりました。平安時代後期は、八九四年に遣唐使が廃止されたのを受け、国風文化が開花した時代です。仏像彫刻においても試行錯誤が重ねられ、後世に多大な影響を与えた日本固有の「和様彫刻」の完成に至った時代であります。阿弥陀如来、地蔵菩薩ともに、長い歴史の中で、多くの人々の祈りを受け止めて参りました。その文化とご縁を、今を生きる私たちが保存し、未来へ受け継いでゆきます。

角度によって表情と姿形が変わる阿弥陀さま

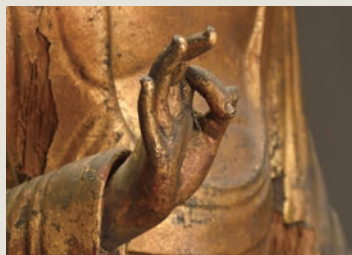
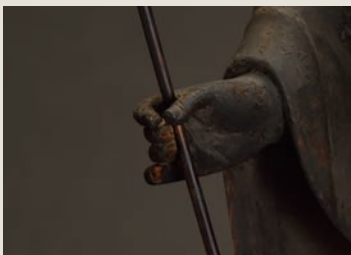
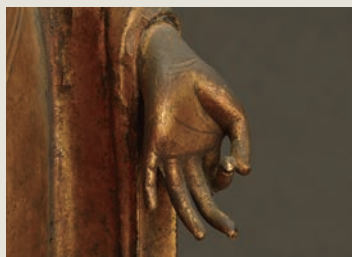
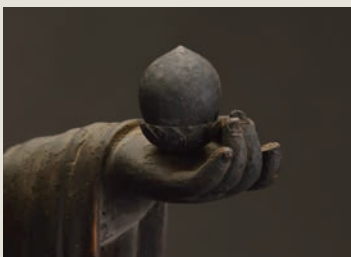
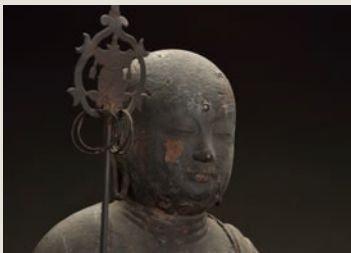
阿弥陀如来像——慈嶽堂——文由閣五階

阿弥陀仏とは、サンスクリット語で「アミターバ（無限の光をもつ者）」「アミターユス（無限の寿命をもつ者）」を表します。この阿弥陀仏の支配する世界が極楽浄土です。また、如来とは、私たちに真理を教え導く者という意味があります。文由閣の最上階、つまり「天」である本堂に、すべての者を極楽浄土に導く仏である阿弥陀如来をお祀りします。

見つめるほどに癒やされる、優しいお顔立ち

地蔵菩薩像——龍樹堂——文由閣四階

納骨堂である龍樹堂の中心には地蔵菩薩をお祀りします。地蔵とは、サンスクリット語で「クシティ・ガルバ」と言い、「大地」「胎内」「蔵」を意味します。右手に錫杖、左手には福德を表す宝珠を持ち、人々の救済にあたられました。私たち人間の世界は、大地と天との間にあります。大地（地蔵菩薩）から天に向けて想いを届けるべく、この地蔵菩薩を囲んでご位牌を安置致します。



日本の文化財を守る

東長寺は、海外に流出した仏像を、国内へ返還・保持します。

文由閣の仏具・装飾

別府竹細工

慈嶽堂天蓋

オオハシバンブーワークス



箆や籠などの日用品として誰もが知っている竹細工。あらためて眺めてみると、実にうまくできています。接着剤も使わず、竹の弾力で形が保たれているのです。美しいカーブはこの弾力の表れでもあります。別府竹細工は、この技術を極めた美術工芸品のひとつです。

別府には日本で唯一、竹工芸の職業訓練校があります

九州は日本の竹林面積の四割を占める竹の産地。なかでも大分県は全国のマダケ栽培の六割を占めます。この竹の名産地で産業として竹細工が始まったのは室町時代。行商用の籠が始まりと言われ

ています。江戸時代、別府は温泉地として名を上げ各地から湯治客が集まります。すると湯治客が使う飯籠、箆などの生活用品がつくられ、土産品としても売られるようになりました。土産は評判を呼び、やがて手の込んだ花籠も登場します。

明治に入ると、土産品の域を超えて工芸品へと発展してゆきます。まずは別府工業徒弟学校(現県立大分工業高校)に竹籠科が誕生。全国から竹職人が集まりました。近代日本は職人の育成も視野に入れていたのです。多くの技術者が輩出されました。現在、別府には日本で唯一の竹工芸の職業訓練校があり、伝統工芸が受け継がれています。ここで紹介する大橋さんも卒業されました。

日用品から美術工芸品へ転換を図った竹細工

昭和三十年代のプラスチック製品の普及によって、別府竹細工は試練を迎えたことがありました。しかしこのとき日用品から美術工芸品へと転換を図ることで危機を脱し、さらに技術が極められることとなります。一九六七年、ついに竹細工で初めて人間国宝が誕生。そして一九七九年、「別府竹細工」は国の「伝統的工芸品」の認定を受けるに至ります。現在は海外のコレクターにも人気があり、欧米のギャラリーがアートとして購入することが増えているのと。しかし手放して喜べる状況にはありません。近年はインテリア雑貨ブームで東南アジアから廉価な竹製品が大量に輸入され、人件費のかかる国産工芸は再び産業としての危機に直面しています。

今回、文由閣五階慈嶽堂の天蓋と二階の装飾に、この別府竹細工が用いられます。制作は竹工芸家の大橋重臣さん。天蓋は竹細工として最大級のもので、寺院に使われるものとしては本邦初の造作。これは竹工芸の未来のあり方を示す、ひとつの試みとなるはずです。

東長寺は、伝統工芸を今に活かして、次世代につなげます。

ものづくりの手仕事を体感する



1 四ツ目編みで小さな籠をつくる工程。まずは底を編む。| 2 作業風景 | 3 大橋さんの照明作品「SHADOW」2010年制作。竹は影も美しい。| 4 道具。その多くはナイフ類。竹細工専用のもので、これらを製作する鍛冶屋も数を減らしている。



伝統技術の捉え方ひとつで 違うものに仕上がる竹細工

大橋重臣「オオハシパンブーワークス」



竹細工は、箆などの小さなものから、インテリア装飾のような大きなものまでつくれることが特長です。しかし材料の仕立てから仕上げまで、すべての工程が手作業。同じ編み方で同じ籠をつくっても、つくり手によって微妙に変わります。何百年もかけて培われてきた技術があります。しかし、それをどう捉えるかで出来上がりが違うのです。習ったとおり編むだけではなく、自分は何をつくりたいのか頭で考え抜いて、チャレンジする。その姿勢が、日用品と美術工芸品の違いになってゆきます。職人の腕の良さは、まず材料の割り、剥ぎの精度に表れます。その先に、編み方の組合せをどうするか、どの技法をどこで使うかという考えを創造することが重要です。理詰めで幾何学の組合せができて、厚みでカタチがおかしくなる。そこまで見越した技を習得するには、五、六年かかるでしょう。

慈嶽堂の天蓋では、最初カタチをデザインしてしまうのではなく、竹の組み方に導かれて自然に生まれてくるようなものをつくりたいと考えています。あたりまえのように存在しているもの。そういうものは時間が経っても飽きがきません。仮に取り外されたときに、何か喪失感を覚えるような自然なものです。そのためにいったん竹の常識を忘れて、新しい自然な編み方の法則のようなものを生み出せたらと思っています。

[写真提供]

フリックススタジオ：写真1,4 | 大橋重臣：写真2-3

輪島塗

厨子 位牌壇

輪島屋善仁 — わじまやぜんに



漆器は英語「Japan」と表されるほど日本を代表する工芸です。生産地は日本各所にありますが、なかでも輪島の漆器は昔と変わらぬ製法を守り、強靱さと美しさが特徴です。江戸時代には産業化がなされ全国へと販路を広げてゆきました。

その理由は独自の下地塗りの技法にあります。能登特産の珪藻土を半炭化させてつくられた「地の子」を練り合わせた下地漆を塗っていく。この下地塗りが他に秀でて堅牢で、長く使われた製品も修理ができる。だからこそ、輪島塗は昔から代々受け継がれ、使われ続けてきたのです。

ところで、秋から冬と寒冷期間が長い輪島は、漆器の製作には必ずしも恵まれた土地柄とは言えませんでした。炭火しか暖房のない時代、漆器の原料となる漆は寒いと乾いてはくれません。そうした期間に、職人たちは自身の創案と試作で腕を磨き、職人たちを統べる親方衆は全国を周り、受注や納品だけでなく豪商・大庄屋といった地方の経済リーダーたちから時代性や文化情報を収集



していき、輪島は漆器をもとにした文化集積地となっていたのです。やがて沈金・蒔絵といった加飾法を含めて意匠も磨かれ、漆器の最高峰として、全国にその名を知られるようになったのです。

輪島塗の担い手はもはや千人足らず

東長寺には、この輪島塗が多く使われてきました。これらを製作してきた輪島屋善仁では、分業による各工程のスペシャリストのリーによって漆器は生み出されています。

残念ながら今日、輪島塗の従事者は千人を切ろうかというところまで減少し、その継承が懸念されます。漆器づくりはある程度の産業規模がないと、漆などの原材料や道具の生産が立ちゆかなくなりそうです。そうすると後継の技術者を育てる環境そのものが失われてしまいます。輪島屋善仁は今、この問題に向き合おうとしています。

漆でもものをつくることの意味

安藤五十治〔輪島屋善仁〕



東長寺さまを初めて訪ねた際には、水の苑や羅漢堂を目の当たりにして、「今までの概念でこのお寺を捉えることはできない」と圧倒されました。その後、位牌壇や厨子を製作し納めさせて頂きましたが、東長寺さまの仕事では常にその意義と構成を考えさせられます。羅漢堂の位牌壇は、形は現代の構成でありながら、昔と変わらぬ用と人との接点を満たしている。これは、つくり手にとつてたいへん大きな誇りです。

今、輪島漆器の継承には、後継者、原材料、道具など多くの課題が存在します。実際、一定レベル以上の質でものを生み出せる工房は暫時減り、今では十を切るのではないかと。漆を例に挙げても毎年ある程度の量を使っていけないと、漆樹の植栽・漆液の採集と使用というサイクルが成り立たなくなってしまうと。素材・技術（人）・意匠、これらそれぞれの課題に向き合いながら時代性を織り込んでいく。そして漆の可能性を信じ、希望をもって一歩踏み出す勇気が大事と考えています。現在製作中の龍樹堂位牌壇は従来の職人技だけでは実現不可能な構成になっています。最新の製作法と伝統の技との組み合わせがあつて初めて具現されたと言えます。

時代が伝統産業を見放すか、あるいは新たな価値の創造で存続が図れるか。伝統工芸に携わる者皆が迷う時代に、幸いにも私どもは東長寺さまにご縁を頂きました。漆でモノをつくるということ、その意味を仕事を通して考える機会を頂いていると受け止めています。〆〆住職はじめ皆さまのご理解のもと、今、真摯に漆のものづくりに向き合えることは、大変幸せなことです。

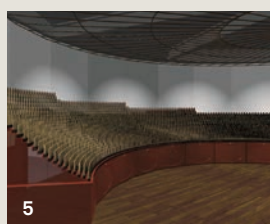
伝統は革新を繰り返す

時代に適合することで、続いてきたもの

かつて「漆の神さま」と言われた人間国宝・故松田権六氏（ごんりく）の言葉が私たちに蘇ります。「伝統とは常なる変革と創案の連続である」。

東長寺羅漢堂の大厨子は輪島では過去になかった平成の厨子の創案といえる大作でした。水の苑の壁画は、紫外線と粉塵に弱い漆を屋外に使うという意欲的な試みに際して、「形あるものはいずれ無に帰る、漆の風化はこれを佳とする」という先代住職の言葉が後押ししてくれました。そして今回、文由閣では大胆に曲線構成を採用入れた位牌壇が製作されます。これも輪島塗史上なかった構想からCGを使って実現した大作です。

漆を未来に〆〆伝統を未来に継承するための革新。文由閣はこれを体現する場とも言えます。



1 漆は、二十年生の木でも1シーズン（六月初旬～十月）で、二百グラム前後しか採れない。「良い漆がなければ過去を超えることはできない」と、輪島屋善仁では岩手県二戸地方で日本最大の漆の森を契約栽培し、高品質の純正日本産漆を使用している。| 2 CGをもとに制作された位牌壇の木地。| 3 輪島では、木地全体に漆を染み込ませ、乾かしてから下地塗りの作業に入る。もとの木へ還るように漆がしみ込んでゆく。漆の木から託された「命」を器に宿らせる工程であり、漆器が「再生の器」と言われる理由の一つ。| 4 新たな形に現代の技術（コンピュータ）と、下地塗り、研ぎ、中塗り、上塗り、熟練した職人の手業の積み重ねが進められている。| 5 国内最大級となる輪島塗による龍樹堂・位牌壇の3D図。

高岡銅器

五具足

銘板

堂名板

鑿子(けいす)

モメンタムファクトリー・Ohii

シマタニ昇龍工房



仏具の九〇%以上が高岡でつくられています

仏具はその精緻さと美しさに心が洗われる高度な美術工芸です。実は日本の寺院で使用されている金属铸件の仏具の九〇%以上が、富山県高岡市で製造されていることをご存じでしょうか。铸件製造は国内随所で行われていますが、美術工芸品の産地となると、この高岡に限られます。原型、铸造、研磨、着色など分業が進み、産業として成立している「高岡銅器」は、国が指定する伝統工芸品のひとつです。

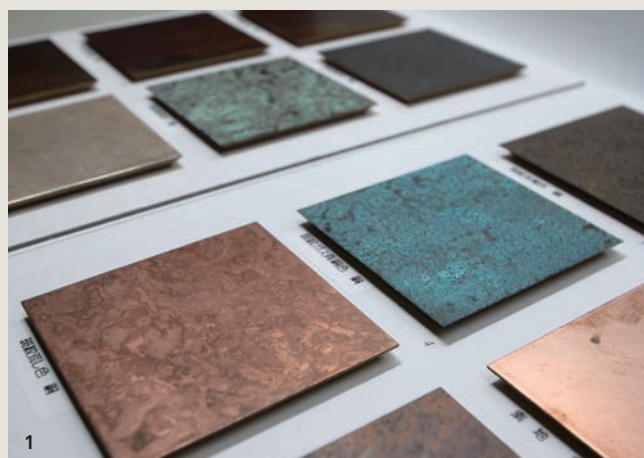
パリ万博に出展された日本の伝統工芸

高岡銅器は江戸初期に加賀藩主前田利長が^{としなが}铸造師を集めて^{ちゅうぞうし}铸物産業を起したことに始まります。鍋、釜、^{くわ}鋏、^{すき}鋤などの日用品を生産しましたが、やがて唐金^{からかね}といわれる青銅器の仏具、香炉なども

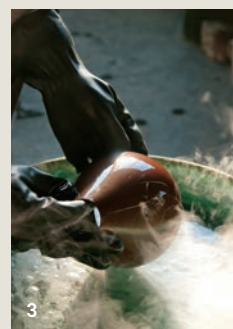
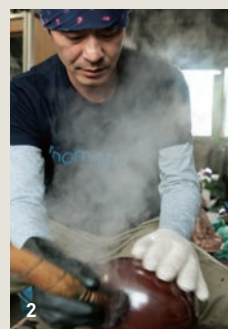
銅板の新しい色と柄を生み出せる貴重な機会

折井宏司「モメンタムファクトリー・Ohii」

高岡は分業が進んでいるところに特徴があります。着色屋がいるのは高岡だけでしょう。それだけ他の産地に比べて発色のバリエーションを多く揃えています。銅の着色は色数が豊富です。色味や明るさ、斑紋を変えて調整しますが、そこに技があります。うちでは銅板を得意としています。この板は小さいほど難しい。斑紋が生み出す色味のすべてを小さなピースに表していなければならぬからです。偏りを出してはいけません。薄い板は薬品に耐えられず着色が難しいとされてきましたが、独自の技術で豊富な発色を生み出すことに成功しました。この技を会得しているのは私と妻だけです。いつか「モメンタムファクトリー」を継承する者が現れたときに、この技は伝授されてゆくでしょう。東長寺のような仕事こそ、新しい色彩や柄を生み出せる貴重な機会です。具体的な仕事を重ねて、伝統の技は蓄積されてゆくのです。



1 銅板のさまざまな色合い。— 2 種の志を束ねた「ネゴボウキ」で磨く作業。鉄漿（オハクロ）の輝きが出る。— 3 金属を硫酸銅と炭酸銅の入った鍋で煮込み「煮色」と呼ばれる色を出す工程。



つくられるようになりました。

明治に入り、廃刀令で職を失った職人が集まります。すると唐金铸件に彫金が施され、高度な工芸品へと進化してゆきます。当時ウィーンやパリの万博でも日本の出展作品として注目されたほどでした。戦中には金属器使用が禁止され、壊滅状態になりますが、戦後はどの家庭でも逼迫していた火鉢や瓶掛^{びんかけ}の生産で再び産業に灯がとまります。高度成長期には、さまざまな美術工芸品が求められ、伝統技法に次々と新しい技術が導入されました。今なお進化を続ける伝統工芸なのです。

文由閣の堂名板、銘板、五階慈嶽堂の五具足は、この高岡銅器でつくられます。製作は「モメンタムファクトリー・Orii」の折井宏司さん。銅器の着色を手がけます。着色といってもペンキを塗るわけではなく、薬品の化学反応で美しく発色した皮膜をつくる仕上げ工程です。文由閣の銘板は銅板製です。薄いゆえに薬品に耐えられず、加工が難しい素材といわれています。しかし折井さんは独自に編み出した着色技術でこれに挑みます。他にはない銅の色を、皆さんの目で確かめることができます。

同じく慈嶽堂には鑿子が納められます。ご家庭の仏壇には「おりん」とも呼ばれる小さなものが置かれますが、ここに納められるのは直径一尺五寸(約四五cm)。こちらは铸件ではなく、金槌で叩いてつくる鍛造で、製作は「シマタニ昇龍工房」の島谷好徳さんです。長く伸びるうねりの音に鑿子の良し悪しが現れるといわれ、うねりがゆつたりと、心地よいリズムになるのが良い音色。この音色は叩いて調律するそうですが、それができる職人は、高岡にもわずかに三人程度。しかし全国の鍛造鑿子の六、七割がここで製造されているのです。高度に伝承の難しい、伝統工芸のひとつです。

一子相伝の調律技術

島谷好徳「シマタニ昇龍工房」

口径一尺、二尺という大きな鑿子は、厚い黄銅板を叩き出してつくりまわす。最後に音を調律しますが、铸件だとそれができません。祖父の代まで、たった一枚の板から絞り出してつくっていました。しかし、たいへんな労力がかかる上に、品質にバラツキが出る。叩きの回数が多いため金属に無理がくるのです。そこで、口、胴、底の3つのパーツに分けて叩き、溶接するという技術を編み出しました。鑿子と同じ材で溶接する技術もまた難しく、それは専門の溶接師がうけ負います。鑿子製作で最も難しい技術が調律です。うねりの音がゆつたりと、上がっては落ちる心地のよいリズムになると。それが良い鑿子なのですが、音の良さ、正しさを聞き分ける耳をもつには時間がかかります。私は先代から音を聞かされ続けて五年、ようやく調律の叩きをさせてもらえるようになりました。一人前になるのに十年はかかるでしょう。修行期間が長いことから、家族にしか伝承できないのが現実です。一子相伝の世界です。



4 シマタニ昇龍工房製作の鑿子。| 5 工房の風景。| 6 金槌で叩くことで板を絞り込み、形を整え、音を調律していく。

[写真提供]

フリックスタジオ:写真1 | モメンタムファクトリー・Orii:写真2-3 | シマタニ昇龍工房:写真4-6

新堂文由閣建立に向けて―仁王葉子「東長寺縁の会 賛助会発起人」

このたびの新堂建立にあたり、僭越ながら、一筆書かせて頂きますことを、どうぞお許し下さいませ。

私が縁の会に入会したのは十年前、二〇〇四年六月でした。四年前に亡くなった夫とともに、現住職のお父さまである和夫和尚さまからお戒名を頂き、夫婦一緒に終の棲家を持つことができました。自宅で遺骨とともに過ごした日々を思い返しつつも、東長寺の素晴らしい伽藍の中で、多くの皆さまに囲まれながら仲よく並ぶ位牌を見るにつけ、とても嬉しく安堵の思いでいっぱいでした。縁の会という新たなお墓のありようをおつくり下さり、私を安心にお導き下さった和夫和尚さまには心より感謝しております。

当時、静岡にあったお墓の整理や、夫の遺骨の安置等々、縁の会事務局の本間龍二さんには大変お世話になり、その温かなお人柄にすべてをお任せすることができました。ほどなくして、突然、和夫和尚さまがあの若さでなくなりになり、後継者となられた遥風さまは大本山總持寺へ御修行に向かわれました。戻られる日を心待ちにしておりましたところ、思いがけず本間さんがお目にかかれる場をつくって下さいました。亡き和夫和尚さまにそっくりな面差しに、とても胸が熱くなりました。東長寺さまへの思いを何らかの形にと心ばかりのご提案をさせて頂きました折、遥風さまから新しい寺院構想をお聞かせ頂きました。伝統を大切にしつつも、新たな試み

に向かって力強く邁進しようとするその姿勢に大変感動致しました。昨年十月、大本山總持寺の一日住職をなさるといいう大切な儀式にも参列させて頂き、その凛々しいお姿を目の当たりにして、東長寺の明るい未来を確信致しました。

和夫和尚さまから遥風さまへのご縁をつないで下さった本間さんが、本年二月に亡くなられたとお聞きした時は、あまりにも早く、あまりにも若くしてお亡くなりになったことに、驚きとともに残念で仕方がありませんでした。皆さま覚えていらっしゃると思いますが、東長寺の行事の際には、いつも本間さんが満面の笑顔で迎えて下さり、何かと話題を見つけてはお声をかけて下さいました。

新堂の最上階は先代慈嶽和夫和尚さまをお祀りする「慈嶽堂」と名付けられ、また四階の「龍樹堂」は本間龍二さんのお戒名である「龍樹」から名付けられたとのことでございます。おふた方がお亡くなりになられたことは大きな悲しみではございますが、それぞれのお名前が「文由閣」に永く留められますことは、私のみならず多くの皆さまにとっても大変喜ばしいことと存じます。

新御住職のますますのご活躍は、今後の私たちの楽しみであり、喜びでございます。一会員として、今後とも東長寺さまとの御縁を大切にして、来たる春の「文由閣」完成を心待ちにしております。

東長寺新収の平安時代の仏像について ―山本勉「清泉女子大学教授」

阿弥陀如来像は像高七二・三cm。頭髮を粒状の螺髪にあらわし、衣を着けて立つ姿です。左手は垂下して、右手は肘を屈して挙げ、いずれも親指と人差し指の先を接して輪をつくります。来迎印というて、極楽の教主阿弥陀如来が往生者を迎えに来るときの印です。ヒノキ材の割矧ぎ造りという技法で、頭と体の中心の部分は一材製。両耳のすぐ後ろを通る線で前後に割った上で、内部を削り抜いた後、首回りに鑿を入れて頭と体を割り放し、体部の背面や両体側部には別の材木を当てています。保存状態はかならずしも良好でなく、両手首先、両足先をはじめ後から補われた部分が少なくありません。表面の漆箔、頭髮部の彩色も補われたものです。

頭部の小さいプロポーションとなで肩で奥行きの薄い体型、浅い衣の彫り方などに、平安時代後期の作風が認められます。十一世紀中頃に仏像彫刻における和様を完成した仏師・定朝（？～一〇五七）の作風にならう、いわゆる定朝様の作品ですが、全体にやや硬く形式化した趣が見られるので、十二世紀中頃ないし後半、平安最末期の作品だと思えます。割矧ぎ造りの技法もそれに矛盾しません。

来迎印の阿弥陀如来像は平安時代後期以来の浄土教興隆のなかで数多く造られるようになったものですが、平安後期には坐像が多く、本像のような立像は多くありません。定朝作の阿弥陀如来立像の遺品は知られませんが、定朝に近い仏師の作品として十一世紀後半の京都・大蓮寺像、十二世紀初めの京都・地藏院像（いずれも国指定重要文化財）などが知られます。東長寺像もそれらと似た姿です。

地藏菩薩像は像高六六・七cm。頭をまるめた僧形で、左手に宝珠を載せ、右手には錫杖を握って立つ仏教信者の苦を代わって受け止める地藏の姿です。やはりヒノキ材でできていますが、一木造りという技法で、両手首先や両足先以外は一本の材木から造られ、内部も削り抜かれています。表面は漆塗りの上にもとは彩色仕上げでしたが、剥落して黒っぽくなっています。古びた色を補った部分もあります。しかし、阿弥陀像のように新しい表面が像を覆うわけではないので、製作当初の雰囲気をよく残しています。両手首先や両足首先が補われていますが、気になりません。穏やかで優しい面貌や奥行きの浅い体型は、阿弥陀像と同じ平安後期の特色ですが、硬さはなく、少し遡る年代の製作でしょう。

平安時代の立ち姿の地藏菩薩像の名品もいくつかの作例が思い浮かびますが、東長寺像からとくに連想されるのは、京都・六波羅蜜寺の像（国指定重要文化財）でしょうか。但馬・前司国挙が女色にふけた罪で地獄に堕ちた時、自らを救ってくれた地藏に感謝するために、その姿を定朝に造らせたと伝えられる像で、伝えはともかく、王朝時代の人々が地藏に求めた優しさを見事に具現化しています。斜めに配した衣のひだを左腰あたりに集める処理は東長寺像と共通しています。東長寺像の由緒はわかりませんが、このような都の名品にならって造られた、平安後期の佳品であることは確かでしょう。

二体の仏像は、いずれも平安時代後期の作風をよく示しています。その時代の人々の祈りを受けとめた仏像が東長寺に祀られることになったのは、大変喜ばしいことだと思います。

やまもと つとむ

清泉女子大学文学部文化史学科教授。1953年横浜市生まれ。東京藝術大学大学院博士後期課程中退。日本彫刻史専攻。著作に、『仏像 日本仏像史講義』（平凡社）、『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇（共編著、中央公論美術出版）、『運慶・快慶と中世寺院』（編著、小学館）など。東京国立博物館名誉館員。文化審議会文化財分科会第一専門調査会委員。東京都文化財保護審議会委員。

東長寺四百二十年の歴史(二)

東長寺が開創されて四百二十年。どんな道のりを辿って現在に至るのか、その歴史を振り返ります。東長寺寺報『萬亀』VOL. 4(一九八七年三月)に掲載していた歴史の再録です。

文政八年から十年(一八二五～二七)にかけて、幕府は諸寺院に命じて「地誌御調帳」を提出させた。『文政寺社書上』(百二十一冊)がそれである。『文政町方書上』(百四十六冊)とともに編纂されたもので、『寺社書上』は地域別に各々の寺社の宗旨、建立年月、所在、山院号、本末関係、宝物類などを書き上げている。

ちなみに『町方書上』は、各町名主より提出させたもので、御城、曲輪内から曲輪外へと向かって江戸府内の町名の起源、町名主名、月行事、町内の陰陽師、修験僧などに至るまで詳細に書き上げられている。東長寺の門前町屋はこの『町方書上』に記されている。

この『町方書上』によると、東長寺の西側の町を廻屋甚兵衛と称する者が住んでいたことから廻屋横町といい、東長寺墓地の脇を源慶寺に向かう坂を茗荷坂といったと記している。いまはすっかり忘れられた古い呼称である。

東長寺の『寺社書上』は文政十年(一八二七)五

月に書き上げられ提出されている。

〈諸尊像〉

本尊・釈迦牟尼如来 木坐像 一尺二寸

右脇 迦葉尊者 木立像 一尺三寸

左脇 阿難尊者 木立像 一尺三寸

達磨大師 木坐像 二尺

大権尊者 木坐像 二尺

が本堂に安置されていた。釈迦三尊を中心に左右の外陣に達磨大師と大権尊者の尊像が安置されていたのであろう。いずれも作者不詳である。

また、

「此外阿弥陀、観音、出山釈迦小像有之候得共檀方より納候外由来相知不申候」

と記している。

ただ観音と記す場合、聖観世音菩薩のことで、阿弥陀如来、聖観世音菩薩、出山釈迦如来の尊像が、檀家から納められ安置されていた。

〈東長寺の山門〉

「中門 柱間九尺五寸 東向

但破壊致候後建直し不申当 礎定残有之候

惣門 柱間九尺九寸 東向

右起立年月日相不申候」

惣門は総門とも書き、禅宗寺院では表門のことと山門ともいう。いつ建立されたかはわからないと

記しているが、江戸府内諸寺院の記録を調べていくと、本堂や山門は建立されてから五十～六十年ほどの間隔で補修を加え、二百～三百年を経過したというものも多く、これだけの資料では断定するわけにはいかないが、恐らく元禄年中ごろの建立ではなからうか。しかし中門は破壊していたことがわかる。

ところが後述する天保十三～四年(一八四二～四三)の『境内作事絵図面』には、惣門、中門が記されている。

〈扁額〉

額 万亀山 堅(縦)二尺三寸七分

玄龍筆 横四尺二寸五分

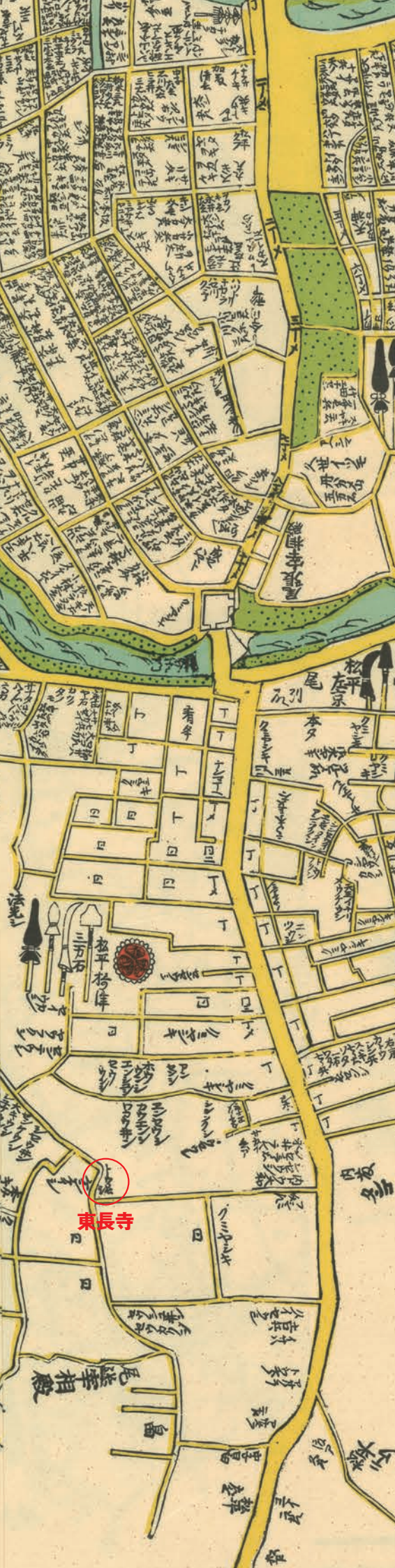
相当に大きな扁額で、惣門、本堂のいずれに掲げられていたかの記述はないが、『続府内備考』には中門と記されている。

「玄龍筆」と記されているが、この玄龍とはいかなる僧かは不明である。

東長寺と深い関わりがあり、しかも寺格が上の寺院の僧とみるべきで、本山・総持寺、関三利・大中正、本寺・勝興寺いずれかの僧であろう。

ここにいう関三利とは、幕府直属ともいえる曹洞宗の大僧録で関東三か寺ともいい、下総・総寧寺、武州・龍穩寺、野州・大中寺のことである。

この大中寺が東長寺の本寺筋にあたっている。



〔鐘銘〕

大鐘銘左之通

大日本国 武蔵州豊嶋郡江府万亀山東長禪寺從雪庭積禪師挿草燈々相統。堂宇法器粗備。畜憾無華鯨之警晨昏者有年。今茲元禄十三庚辰孟秋、土肥氏豊知權令妻山崎氏女法如月院楓屋貞紅大師掩粧之憂也。土肥氏先祖自初寺基。世僧務進止于憾越鑄銅鐘一口寄寺補禪誦規則之闕、尚薦亡婦幽冥之福也。於戲鐘聲之最於佛事者、其德不可言言矣。予欲使此善勲垂不朽而乃為銘。

銘曰

金口木舌 說法無窮 似春入律 如月行空
非声々徹 千界円通 不聞々透 九有消融
謝罪薦福 覺路成功 齊規垂範 万亀梵宮
祐民鎮国 号令奚終

崇元禄十三庚辰八月穀旦

万亀山東長禪寺現住論大通誌

武州江戸住

治工 田中丹波大掾藤原重行 作

日本国、武蔵国豊嶋郡江戸府内の万亀山東長禪寺は、雪庭春積禪師が草創し、いろいろ法灯をともしつづけてきた。堂宇の法器もあらかた整っている。しかし梵鐘を朝に夕に撞いて衆生をいましめることがかなわぬといううらみを有する年月を送ってきた。元禄十三年の初秋、土肥豊知の妻、法如月院楓屋貞紅大姉が没した。土肥氏の先祖が当寺を開基してから、歴代住職はいろいろとさしずして務をはたしてきた日々を懐しみ、銅鐘一口を鑄造して寺に寄せ、禪誦規則の欠けた点を補うとともに、土肥氏の妻に冥土の福を供える。ああ、鐘声は仏事においては最大の徳であり、とやかきうことはない。予はこの善勲を不朽たらしめんと欲して銘とする——といった意味で、このあとに十四行の四言古詩(古体詩)がつづき、「万亀山東長禪寺論大通誌」と当時の住職名が記されている。

この住職は元禄の中興(再中興、重興)の祖にあ

たり、東長寺歴代簿の「輪大和尚」ではないだろうか。「輪大和尚」は東長寺第六世にあたり年代的にも符号する。

寺院に所蔵される「過去帳」「歴代簿」は、何代かのうちに写し替えられている場合が多く、この書き写されたとき「論」を「輪」と写し誤ったと考えられる。

「論大通誌」を「論大通大和尚誌」と読むこともできるが、僧名を二字もしくは三字で誌す場合は敬意の念をもつてのことと、鐘銘などを記す場合、自分自らを三字名で記した例は少なく、「論大」が「通誌」したとみるべきではなからうか。

またこの梵鐘を鑄造した藤原重行に関しての資料は皆無だが、元禄年中において相当名のある人であったようで、多くの梵鐘鑄造にたずさわっている。四谷北寺町の浄運寺の梵鐘も藤原重行によるものである。

檀信徒会館「文由閣」建築設計について「Ⅲ」手島涼仁「東長寺寺務長」

これまで、現在建設中の檀信徒会館「文由閣」の特徴について、地中熱を利用した空調設備の特徴と、免震装置を導入した構造デザインの特徴を掲載して参りました。今回は、パッシブハウス認定を目指した意匠デザインの特徴を説明させていただきます。

多くの皆さまは「パッシブハウス」という言葉を初めて聞かれるのではないのでしょうか。そこでまずは「パッシブハウス」というものがどういうものであり、どのような特徴をもつのか、実際にどのような事例が存在するのかを説明した後、この度の檀信徒会館「文由閣」への導入意図、その方法などを述べたいと思います。

まずは「パッシブ」とは、どんな意味があるのか。英語の辞書を調べてみると、名詞としては「受動態」とあり、形容詞としては、「自分からは積極的に働きかけないさま、受動的、消極的」とあります。そしてその反意語は「アクティブ」とあります。よって皆さまにとつては、「アクティブの反意語」という方が馴染みやすいかもしれません。そして次はこのパッシブにハウスという言葉をつけるとどうなるか。「消極的な家?」「受動的な家?」という訳語になつてしまい、どうにもピンときません。そこで専門家が記した本の中から抜粋してみます。「パッシブハウスは一九九七年にドイツの物理学者ヴォルフガング・ファイスト博士が確立した省エネ基準です。ファイスト博士が立ち上げたパッシブハウス研究所では、パッシブハウスの設計ツールを開発し、独自の認定制度を築き上げました。建物の躯体(外皮)性能を向上させることで、暖房設備は最小限となり、経済性を維持しながら居住性の高い省エネ住宅をつ

くるのがパッシブハウスの目的であり、現在ではヨーロッパ以外の地域でも、気候風土に合わせたパッシブハウス設計の取り組みがなされています」(『図解エコハウス』竹内昌義・森みわ共著)と、書かれています。これでもまだピンとこない方もいるかもしれませんが、引用中にもあった「エコハウス」という表現の方が日本では受け入れやすそうです。

パッシブハウスの認定を受けた住宅はどんな特徴があるのか、同じく『図解エコハウス』を参照してみます。「パッシブハウスの躯体性能は、住宅程度の大きさであれば、六畳用エアコン一台程度で建物を冷暖房できる状態に相当します」。また、「窓や換気設備、断熱工法などの省エネ建材の単価が下がってきたことや、各国の義務基準が引き上げられていることにより、パッシブハウス建設のためのコストアップは寒冷地のドイツ語圏でも5%以下」とあります。私なりに要約すると、「建設コスト(坪単価)は従来より上昇するが、それに比して冷暖房性能が上がるため、冷暖房にかかるコスト(電力代)が安くなり、住宅にかかるトータルコストは安くなる。また空調設備の使用頻度が低下するため、二酸化炭素の排出なども抑制される」となります。現在ではエコ住宅といえなさまじまな取り組みがなされており、パッシブハウスだけがエコ住宅ではありません。しかし再生可能エネルギー(太陽光や地中熱など)を利用した設備を導入するということは、すなわちアクティブハウスということになり、ただ建物が建っているだけで省エネルギー化が実現するパッシブハウスとは、大きな違いがあるといえるでしょう。

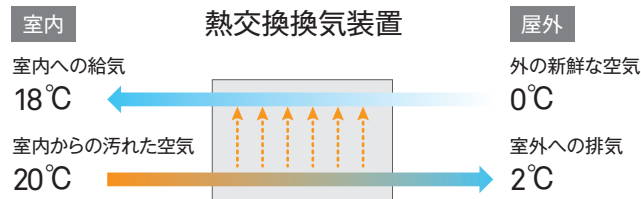
さて東長寺では、檀信徒会館建設計画中に東日本大震災を経験致しました。新住職を中心に計画を進めておりましたが、この震災とそれに伴う福島第一原子力発電所の事故を真剣に受け止め、新しい建物は「エネルギー」というものに対する回答を受け止提示したいと思うようになりました。そのひとつの回答が、このパッシブハウス認定を得るということでした。

現在、パッシブハウス認定を受けている建物は、ヨーロッパを中心に建設されており、木造に限らず鉄筋コンクリート造のパッシブハウスもあります。さらには一般住宅以外にも共同住宅やオフィス、公共建築物なども建築されています。住まい手からの発熱も有効利用するパッシブハウスは気温がマイナス十二℃にもなる極寒の地でも、アクティブな暖房設備なしでも過ごせるほどで、その省エネ性、断熱性、気密性は世界トップレベルです。パッシブハウスの基準は世界各国の省エネルギー基準の中で最も厳しいと言われ、基準を満たすためには、窓や断熱材、換気装置の選別、気密・断熱の施工技術に施工が求められております。しかし日本は四季がある独特な気候風土であるため、通風や樹木による夏の日射の遮蔽、土壁の性能評価などを含む、日本の気候風土に適応したパッシブハウスのあり方が求められています。

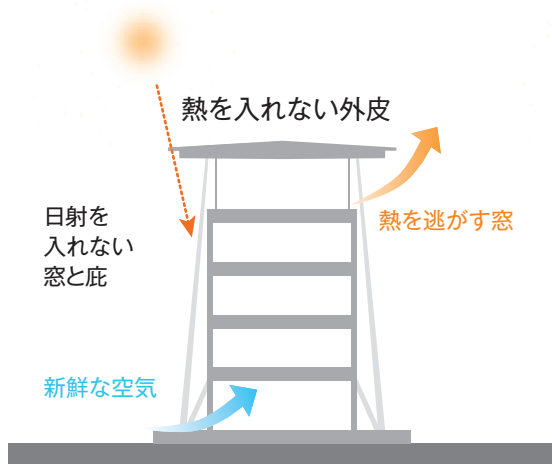
檀信徒会館建設にしましては、十月末においても気密性能の計算やそれに伴うガラスカーテンウォールの設計が続いております。最終的には竣工後、ドイツのパッシブハウス研究所に審査を依頼し認定を得ることになります。順調に進んでこのパッシブハウス認定を得ることができたら、世界初の宗教建築となります。これは日本もさることながら、世界に誇れる宗教建築を東長寺が建立したことになります。檀信徒の協力があつての快挙といえるでしょう。

熱交換換気装置の仕組み

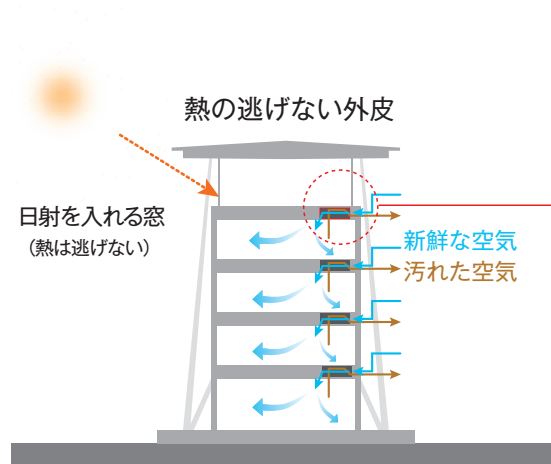
常に熱は高い方から低い方に向かって動く性質を利用。



パッシブハウスの夏



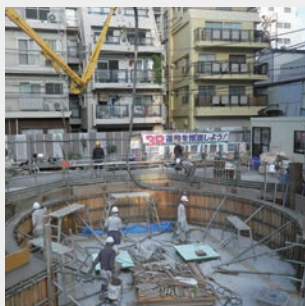
パッシブハウスの冬



檀信徒会館「文由閣」工事の進捗状況

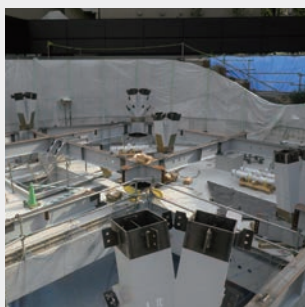
今年一月の着工から、事故もなく順調に工事は進み、間もなく一年を迎えます。極力エネルギーを消費しない「パッシブ建築」のありようを追求した挑戦的なプロジェクトとして、関係者一同、智慧と経験を総動員して、一丸となつて取り組んでおります。明年五月の完成に向けて、ご不便をおかけすることもあるかと思いますが、よろしくお願い申し上げます。

八月



文由閣を力強く支える地下一階の擁壁、免震基礎工事の実施

九月



大地震の揺れを制御する免震装置を設置

十月



柱と梁の組み上げ工事開始

十一月



仮囲いの向こうに、文由閣の姿が立ち現れる

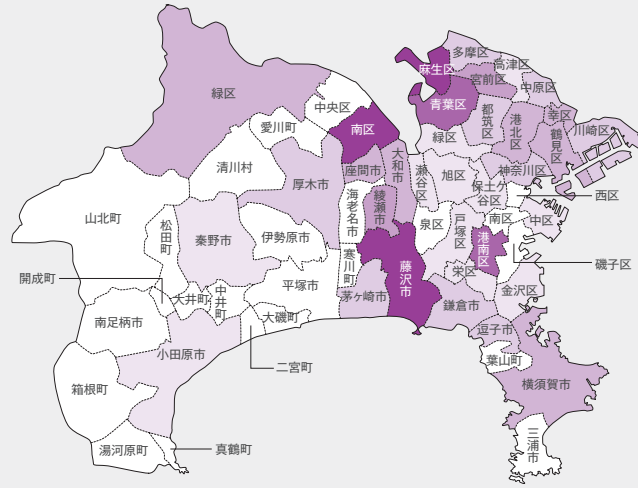


[写真提供]

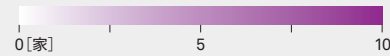
松井建設：右列上3点 | P3 art and environment：右列下段および左列6点

檀家・縁の会会員の居住地マップ

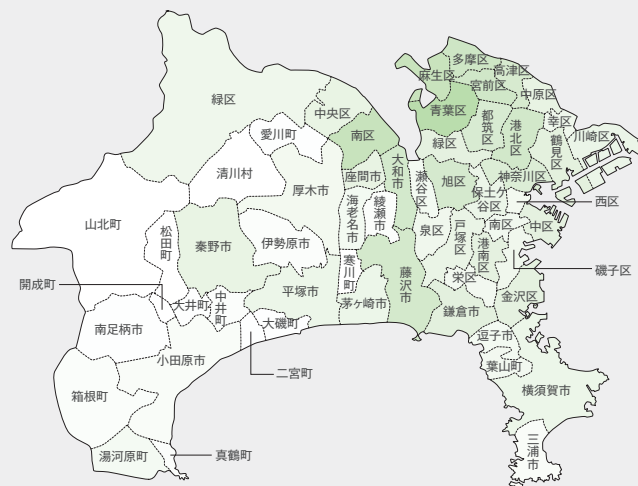
神奈川県



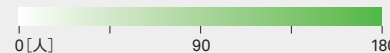
檀家の皆さま



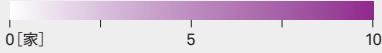
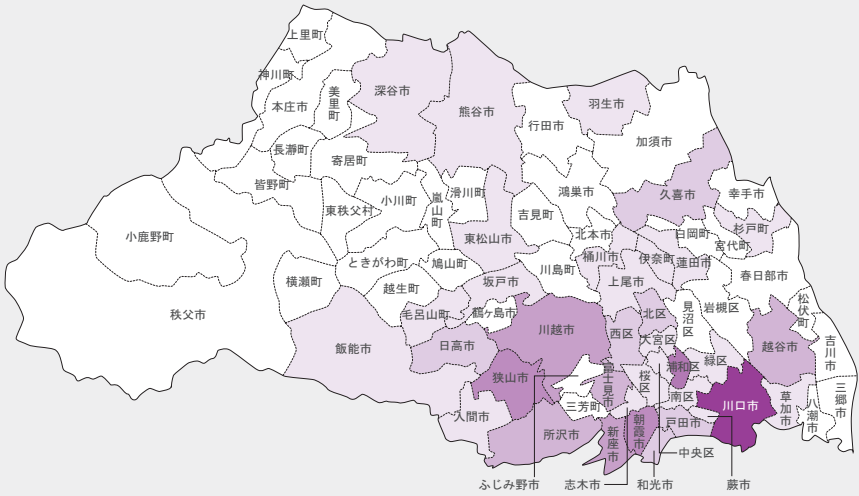
	0[家]	5	10	0[人]	90	180
愛川町			0			1
厚木市			2			11
綾瀬市			4			3
伊勢原市			0			3
海老名市			0			10
大磯町			0			1
大井町			0			1
小田原市			1			5
鎌倉市			2			27
川崎市			23			249
麻生区			9			57
川崎区			2			18
幸区			3			15
高津区			1			40
多摩区			2			50
中原区			2			22
宮前区			4			47
相模原市			12			94
中央区			0			21
緑区			3			15
南区			9			58
座間市			3			21
逗子市			2			10
茅ヶ崎市			2			17
中井町			0			3
二宮町			0			1
箱根町			0			4
秦野市			1			21
葉山町			0			12
平塚市			0			17
藤沢市			9			43
真鶴町			0			3
三浦市			0			5
南足柄市			0			1
大和市			3			44
湯河原町			0			9
横須賀市			3			17
横浜市			32			471
青葉区			7			73
旭区			1			42
泉区			0			14
磯子区			0			14
神奈川区			2			34
金沢区			1			25
港南区			7			26
港北区			3			45
栄区			1			12
瀬谷区			1			10
都筑区			2			38
鶴見区			3			26
戸塚区			1			20
中区			1			25
西区			0			11
保土ヶ谷区			1			18
緑区			1			25
南区			0			13
			99 (総数)	1104 (総数)		



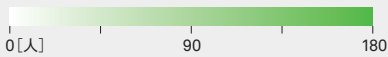
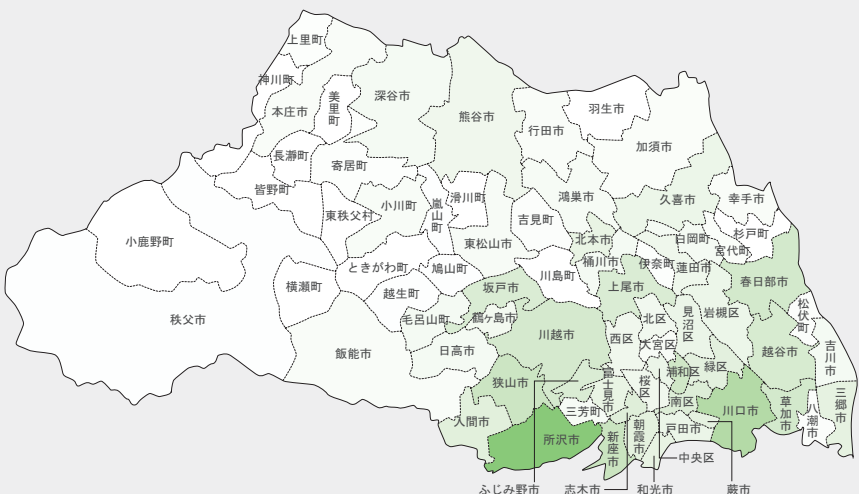
縁の会の皆さま



埼玉県

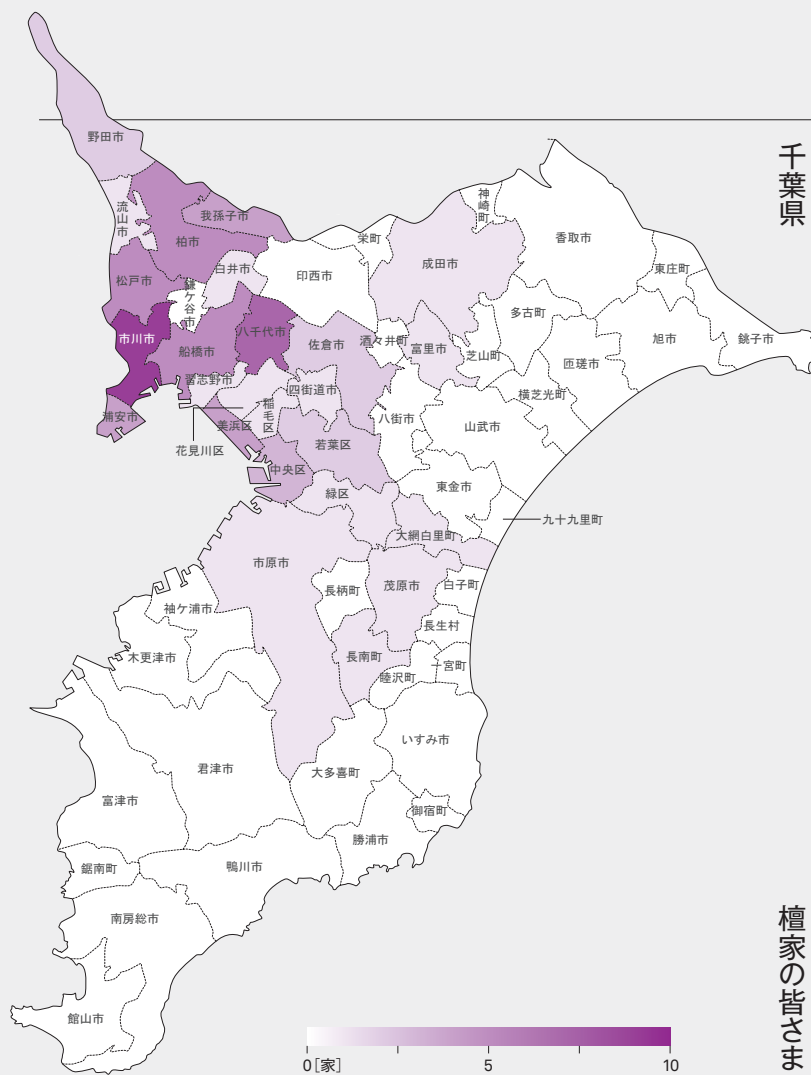


檀家の皆さま



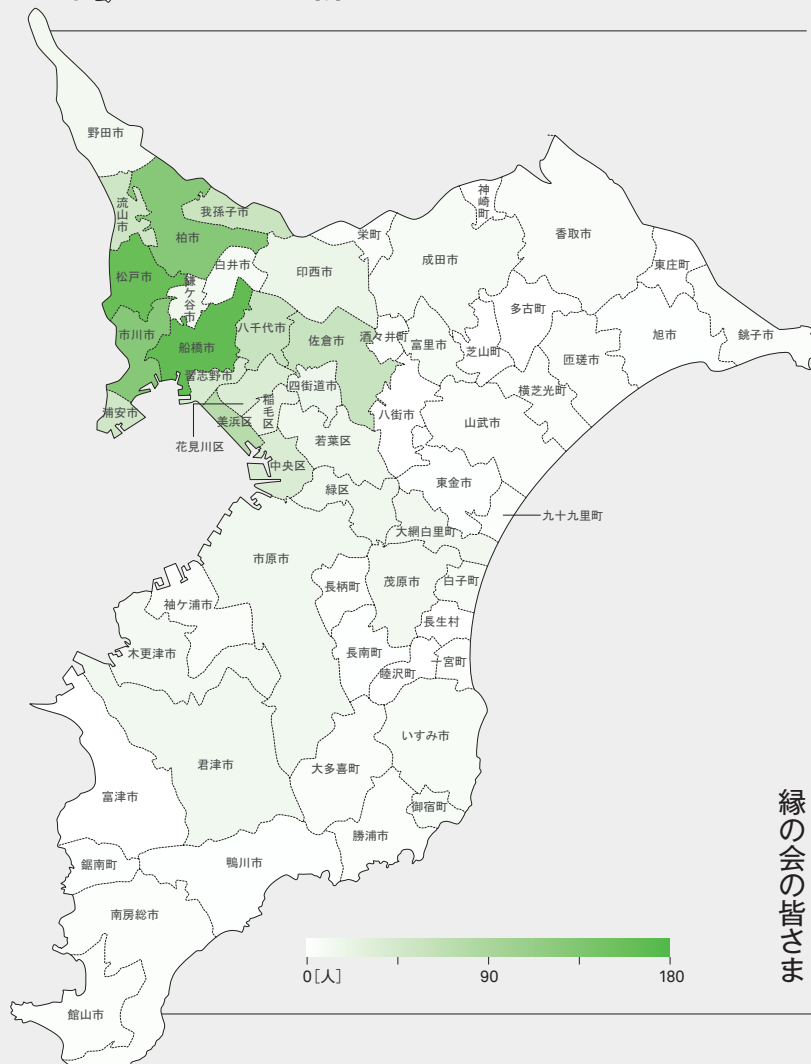
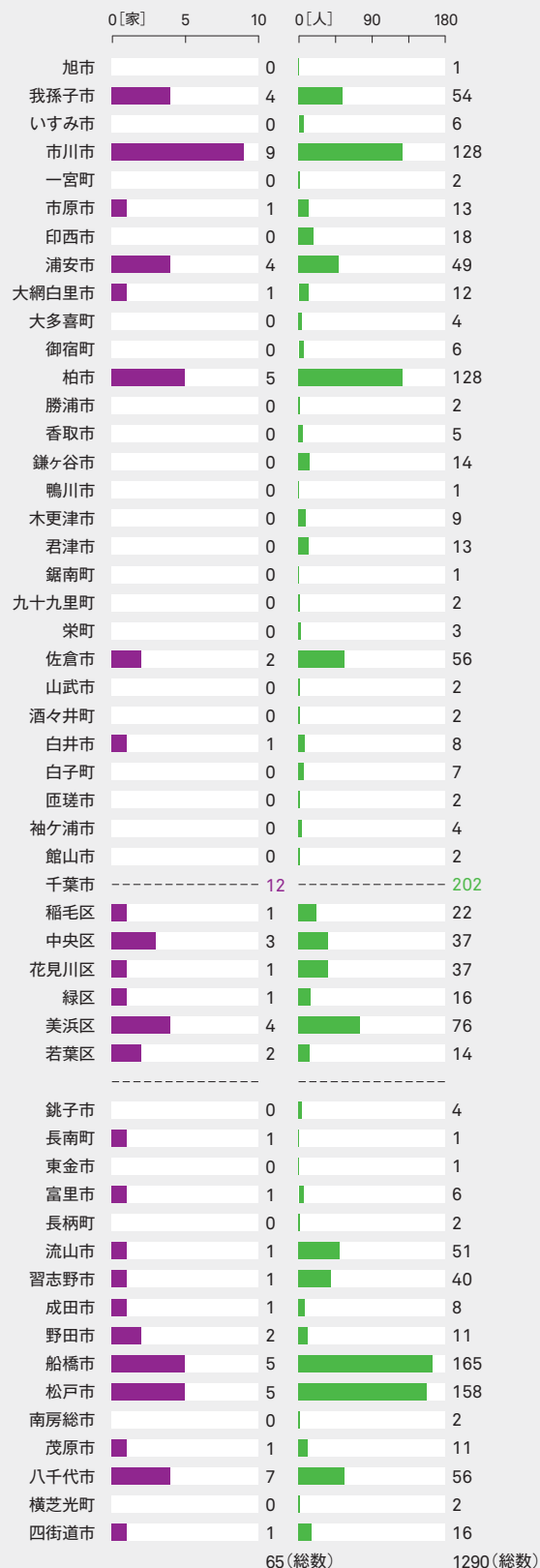
縁の会の皆さま

	0[家]	5	10	0[人]	90	180
上尾市			1			36
朝霞市			5			26
伊奈町			1			2
入間市			1			28
小川町			0			6
桶川市			1			9
越生町			0			1
春日部市			0			44
加須市			0			4
上里町			0			2
川口市			9			79
川越市			4			42
北本市			0			21
行田市			0			5
久喜市			2			17
熊谷市			1			14
鴻巣市			0			8
越谷市			3			40
さいたま市			15			210
岩槻区			0			17
浦和区			6			48
大宮区			1			7
北区			2			13
桜区			1			14
中央区			1			18
西区			2			14
緑区			1			27
南区			1			33
見沼区			0			19
坂戸市			1			36
幸手市			0			5
狭山市			5			52
志木市			1			31
白岡市			0			9
草加市			1			44
杉戸町			1			0
秩父市			0			1
鶴ヶ島市			0			11
所沢市			3			125
戸田市			2			19
新座市			4			54
蓮田市			1			15
鳩山町			0			1
羽生市			1			0
飯能市			1			5
東松山市			1			7
日高市			2			9
深谷市			1			9
富士見市			3			21
ふじみ野市			0			37
本庄市			0			5
松伏町			0			3
三郷市			0			24
宮代町			0			4
三芳町			0			8
毛呂山町			1			9
八潮市			0			3
吉川市			0			9
吉見町			0			3
寄居町			0			2
嵐山町			0			1
和光市			2			22
蕨市			1			25
75(総数)						1203(総数)



千葉県

檀家の皆さま



縁の会の皆さま

年末年始 山内行持のご案内

修正会ならびに新年会のお知らせ

平成二十七年年度修正会法要ならびに新年会は、左記の日程にて開催致します。新年のお祝いのひとときをお過ごし頂ければ幸いです。

当日は、新年の祝祷とともに、ご長寿を祈念して「賀寿」のお祝いを致します。ささやかながら、お祝いの品をご用意させて頂きました。

寒中ではございますが、万障お繰り合わせの上、ご参加下さいますよう、山内一同お待ち申し上げます。

・日程…平成二十七年一月十八日〔日〕

・受付…午後12時半より

・会場…明治記念館（JR信濃町駅より徒歩5分）港区元赤坂二―二―二十三

・会費…お一人につき一万円

・定員…二〇〇名

・お申し込み…お電話にてお申し込み下さい。〆切りは一月十日〔土〕までとさせて頂きます。なお、賀寿に当たられる方は事前にお申し付け下さい。

・「賀寿」

古希（数え年70歳）昭和21年生まれ

喜寿（数え年77歳）昭和14年生まれ

傘寿（数え年80歳）昭和11年生まれ

米寿（数え年88歳）昭和3年生まれ

卒寿（数え年90歳）昭和元年生まれ

白寿（数え年99歳）大正6年生まれ

紀寿（数え年100歳）大正5年生まれ

・お支払い方法…後日郵便振替え用紙を送付致します。

通信欄に、ご出席者のご住所・お名前を記入の上、一月十五日〔木〕までにお支払い下さい。

なお、キャンセルに伴う返金は、一月十日〔土〕までを申し受け日とさせて頂きます。

大掃除

・日程…十二月十八日〔木〕午後1時より

山内の大掃除を、皆さまと一緒に行いたいと思います。年分行持案内にて十九日とご案内しておりましたが、都合により、左記の日程とさせて頂きます。ご都合のつく方は、ぜひ、ご参加下さい。

懺悔会・おもちつき

・日程…十二月二十八日〔日〕午前9時半より

懺悔会は、一年間の行いを懺悔し、心身ともに清浄にして、来たる一年間のための災障消除を祈念致します。佛の名を唱えながら何度も礼拝し、自分自身を見つめることが主眼の法要です。

引き続き、お餅つきを致します。山内すべてのお堂のお供え餅をつくります。都会では少なくなつたお餅つき、杵を持つのは初めてという方も多いかと思いますが、ぜひ挑戦してみてください。つきたてのお餅を召し上がって頂きます。

歳末年始法要・除夜の鐘

・日程…十二月三十一日〔水〕

・午後11時15分より 年末法要

・午後11時45分より 除夜の鐘

引き続き 年始法要、萬灯供養

大般若を転読し、新年の多幸を祈念致します。

ご自身のみならず、世界の人々の平和を、ご一緒にお祈り致しますよう。

縁の会―大般若祈祷会のご案内

・日程…平成二十七年二月一日〔日〕

縁の会の皆さまの繁栄と山門の興隆を願う大般若祈祷会を、先の通り厳修致します。

玄奘三蔵法師が天竺より伝えた「大般若経六百軸」の金文を転読することによって、諸願成就・災障消除・諸縁吉祥を祈るものです。なお、当山の大般若経は、檀信徒の手により一字一写経された寺宝の経文です。お誘い合わせの上、ご参列下さいますようお願い申し上げます。

当日は、願主のお名前と願い事を書いた御札をご祈祷致します。

左記ご参照の上、願文をお選び下さい。

・御祈祷料 一願につき 五千円（当日、受付にてお納め下さい）

・願文例

心願成就（心にある願い事がかないますように）

家内安全（家族が安らかでありますように）

交通安全（交通事故にあいせんように）

商売繁盛（商売がうまくいきますように）

火盗消除（火事や盗みにあいせんように）

傷病治癒（病氣や怪我が治りますように）

身体健全（健康でありますように）

学業成就（学業が成就しますように）

仏道精進（仏道に勤しみ皆が幸せになりますように）

・参列のお申し込みならびに願文は一月二十五日〔日〕までに、

お電話もしくはFAX、ハガキにてお知らせ下さい。

・お申し込み・お問い合わせ（午前9時―午後5時）

東長寺（代表）…03-3341-9746 FAX…03-3341-2150

縁の会事務局…03-3353-6874 FAX…03-3353-7027

・日程表

時程	内容	場所
14時	受付開始	総受付
14時30分	大般若祈祷会	本堂
15時30分	舞踏音楽劇	本堂
16時30分	おしのぎ	食堂
17時	仏教文化講座	羅漢堂
18時30分	萬灯供養	本堂

舞踏音楽劇「古代蓮物語」

原作：田代敬二／演出：草薨馨／語り：谷英美／舞踏：オソダミホ／ソプラノ：一井優希／テノール：木村壯宏／打楽器：吉田政美／ピアノ：RIMAKO／美術：伊東謙介・山崎克也／協力：藝術福祉振興機構グレイス・ソサエティ、忍の行田の昔ばなし語り部の会
埼玉県行田市で3000年以上前の古代蓮の種が出土し自然開花しました。1968年に埼玉古墳群から出土した国宝「金錯銘鉄剣」とともに、古代に秘められたメッセージを皆さまにお届け致します。

開山忌

左記の日程にて、開山忌法要を執り行います。

東長寺を開かれた雪庭春積大和尚ならびに、開山堂にお祀りされている方々のご供養を致します。

・日程…平成二十七年二月二十二日〔日〕午前11時より

・会場…開山堂

縁の会―説明会 御寄進、檀信徒会館「文由閣」、新縁の会について

現在東長寺において、さまざまな事業、活動を展開しております。つきましては、来年以降も引き続き、縁の会会員の皆さまに詳細をご案内する機会を設けたく、左記日程にてご説明申し上げます。檀家さま向け説明会は、別途ご案内申し上げます。

・説明内容

御寄進について（寄進の目的、使途、監査など）

檀信徒会館「文由閣」の建築説明（主に用途）

新縁の会の仕組みについて（現在の縁の会との相違、入会金の使途）

・日時

平成二十七年二月九日〔月〕午前10時30分～（1時間半程度）定員50名

平成二十七年三月十日〔火〕午前10時30分～（1時間半程度）定員50名

四月以降も説明会を開催する予定です。

日程などの詳細は、次号でご案内致します。

・お申し込み・お問い合わせ（どちらも午前9時―午後5時）

東長寺（代表）…03-3341-9746

縁の会事務局…03-3353-6874

・その他

説明会は、ご法事その他の関係上、すべて平日を予定しております。

土日祝日にご希望の方は、ご連絡下さい。

人数がある程度集まりましたら、日時を設定して実施致します。

行持案内（平成二十六年十二月―平成二十七年三月）

フリーダイヤル

0120-3351850は

年内にて停止致します。

ご了承ください。

仏教文化講座

元旦を除く毎月一日は、羅漢堂にて左記の要領で仏教文化講座を開催しています。

檀信徒のみならず、広く一般の方にも参加して頂きますので、皆さまお誘い合わせの上、来山下さい。なお、参加費は無料です。

毎月一日 開場…午後4時半／開講…午後5時

・2月1日〔日〕 「文由閣の構造・意匠・設備」 谷川充丈氏〔アラップ・シニア構造エンジニア〕

・3月1日〔日〕 「文由閣とパッシブハウス」 森みわ氏〔キアー・キテクト代表〕

・4月1日〔水〕 「文由閣のランドスケープ」 霜田亮祐氏〔ビュマス代表〕

〔各種教室のご案内〕

坐禅会

・毎週土曜日

※年内・二月はお休みし、翌年二月よりおつとめます。

・時 間…午後6時―午後7時半

・服 装…坐禅を行いやすい服装

写経会

・毎月第2・第4木曜日※十二月は第二木曜日のみ

・時 間…午後2時半―午後3時半

・持 物…手になじんだ小筆があれば、ご持参下さい。

お経の唱和と経典講読の会

毎月一回、第三金曜にお経と仏教讃歌のご指導をしております。左記日程をご参照の上、お誘い合わせの上、ご参加下さい。

・12月19日〔金〕

・1月16日〔金〕

・2月20日〔金〕

・3月20日〔金〕

・時 間…午後1時―午後2時

・参加費…一、〇〇〇円

・会 場…東長寺本堂

折り紙教室

・講師…湯浅信江先生〔お茶の水・おりがみ会館〕

・12月18日〔木〕

・1月15日〔木〕

・2月19日〔木〕

・3月19日〔木〕

・時 間…午後2時より

・受講料…三、〇〇〇円〔材料費・お茶代込み〕

・会 場…カフェ「きあん」

水彩画同好会

- ・ 12月11日〔木〕
- ・ 1月8日〔木〕・26日〔月〕
- ・ 2月12日〔木〕・23日〔月〕
- ・ 3月12日〔木〕・23日〔月〕
- ・ 時間…午後2時より
- ・ 参加費…一、〇〇〇円
- ・ 会場…カフェ「きあん」

長麺会「そば打ち同好会」

- ・ 12月8日〔月〕
- ・ 1月26日〔月〕
- ・ 2月23日〔月〕
- ・ 3月23日〔月〕
- ・ 時間…午前10時より
- ・ 参加費…一、五〇〇円
- ・ 会場…東長寺一階 食堂
- ・ 連絡先…042-557-4632〔担当 横山〕
042-942-3930〔担当 舟木〕

うたごえ茶房 ゆりかご

- ・ 1月5日〔月〕
- ・ 2月2日〔月〕
- ・ 3月2日〔月〕
- ・ 時間…午後2時より
- ・ 参加費…五〇〇円〔ランドリンク付〕
- ・ 会場…カフェ「きあん」

碁縁の会「囲碁の会」

- ・ 12月11日〔木〕
- ・ 1月8日〔木〕・22日〔木〕
- ・ 2月12日〔木〕・26日〔木〕
- ・ 3月12日〔木〕・26日〔木〕
- ・ 時間…午後1時より
- ・ 会場…カフェ「きあん」
- ・ 連絡先…042-563-0634〔担当 貝〕
042-467-3081〔担当 三橋〕

観世流謡曲教室のご案内

- ・ 講師…中島志津夫先生〔観世流能楽師〕
- ・ 12月4日〔木〕・11日〔木〕
- ・ 1月22日〔木〕・29日〔木〕
- ・ 2月5日〔木〕・19日〔木〕
- ・ 3月5日〔木〕・12日〔木〕
- ・ 時間…午後1時半より
- ・ 受講料…六、〇〇〇円〔月毎〕
- ・ 会場…書院二の間

コーラス同好会・法律相談会

都合により、当分の間お休みさせていただきます。

仏教讃歌を歌う会

- ・ 12月19日〔金〕
- ・ 1月16日〔金〕
- ・ 2月20日〔金〕
- ・ 3月20日〔金〕
- ・ 時間…午後2時―午後4時
- ・ 参加費…一、〇〇〇円
- ・ 会場…カフェ「きあん」

秋彼岸会チャリティーバザーの報告

秋彼岸会チャリティーバザーの売上げは、三六万二五三円となりました。

お買い上げ頂いた方はもちろん、ボランティアスタッフの方や、手作りの作品をご提供下さった方、寄付を下さった方等々、多くの皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。

新緑の会のご案内（東長寺が提案する新しい樹林葬の形）

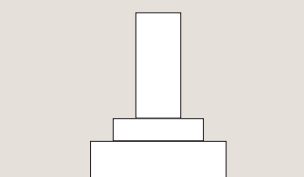
羅漢堂（墓地から納骨堂へ）

平成八（一九九六）年六月、東長寺縁の会は「永代供養付き生前個人墓」というこれまでにない新しい仕組みを導入することによって、葬送のあり方に一石を投じました。その特徴は、①自分自身の意志で生前に遺骨の埋葬場所を決める、②二代限りのお墓であること、③永代供養を約束すること、④室内の納骨堂であること、の四点に集約することができます。そのどれもが当時は新しい仕組みとして受け入れられ、そして現在では多くの寺院で、あるいは公共の墓地で取り入れられています。

千手堂（分骨という新しい仕組み）

平成十八（二〇〇六）年十一月、羅漢堂が予定募集数の八五〇〇人に達したことから、坐禪堂を改装した「千手堂」での募集を始めました。ここでは一つの大きな転換点を迎えることになりました。羅漢堂での納骨方法は関東地方で一般的に火葬後に収骨する骨壺（高さ八寸）のままお預かりしておりましたが、山内議論を重ね、一部の遺骨を千手堂でお預かりし、残りは総墓（多宝塔）への合葬ということに致しました。これには大きく二つの理由があります。一つは納骨スペースという物理的問題、いま一つが、供養の対象が遺骨ではないのではないかという宗教的な問題から出た結論であります。

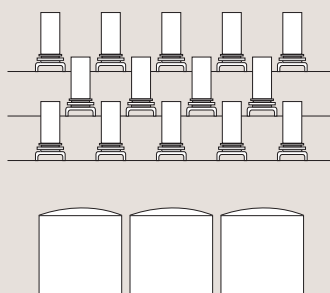
従来型墓地



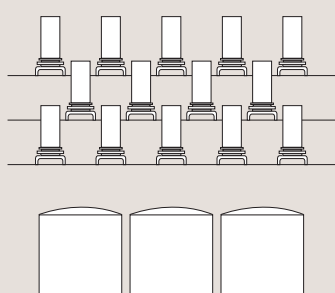
家族単位から
個人単位へ

従来型の墓地から
納骨堂へ

羅漢堂



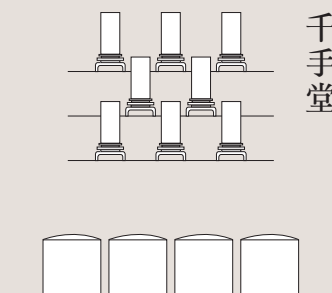
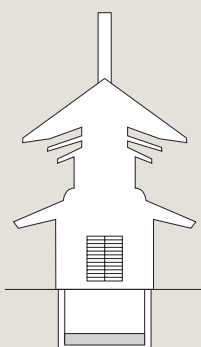
羅漢堂



残りは合葬

分骨をして納骨

千手堂



龍樹堂（両墓制）祀り墓と参り墓という仕組み

平成二十六（二〇一四）年十二月、千手堂が予定募集数の三七〇〇人に達することが予定されています。そこで現在建設中の檀信徒会館「文由閣」内に新しい納骨堂を建立することを決定致しました。新しい納骨堂の名称は、龍樹堂となります。羅漢堂から千手堂へ、そして龍樹堂へ。縁の会の納骨堂はそれぞれの時代に応答した納骨方法を提案して参りました。この龍樹堂は両墓制というものを提案させていただきます。

墓地（納骨堂）は、祭祀と埋葬（納骨）という二つの役割を有しておりますが、日本にはかつて、その二つの役割を分離させる両墓制と呼ばれる仕組みが存在しており、現在でも一部の集落で現存しております。東長寺のこの度の提案は、単なるこれまでの両墓制の復活ではなく、その考えは踏襲しつつも、そこに新しい価値観を導入し、都市（都市の寺院＝参り墓）と地方（地方の寺院＝祀り墓）がともに永続的に発展できることを目指しております。

首都圏では、今後死亡者数の増加が喫緊の課題となっており、それはすなわち墓地不足に直結致します。しかし高密度化している都市においては、新規に墓地（納骨堂）の整備は難しい状況となっています。一方、地方では檀家の減少（後継者不足）が課題となっており、それはすなわち寺院経営の先行きの不安に直結します。その両者を結びつける手法が今回導入予定の両墓制というものです。東長寺の新縁の会に入会された方の遺骨を地方に埋葬することが、東長寺での納骨スペースの省スペース化につながり、そして地方の寺院の経営が安定につながるという構図です。

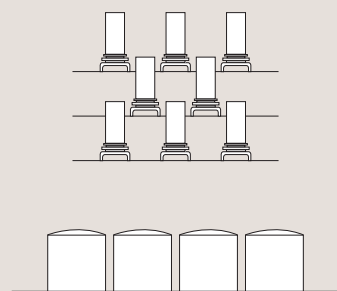
新縁の会入会手続きについて

※正式なお申し込みは、文由閣納骨堂の「納骨堂経営許可」が下りてからとなります。予定は、明年五月頃の予定です。

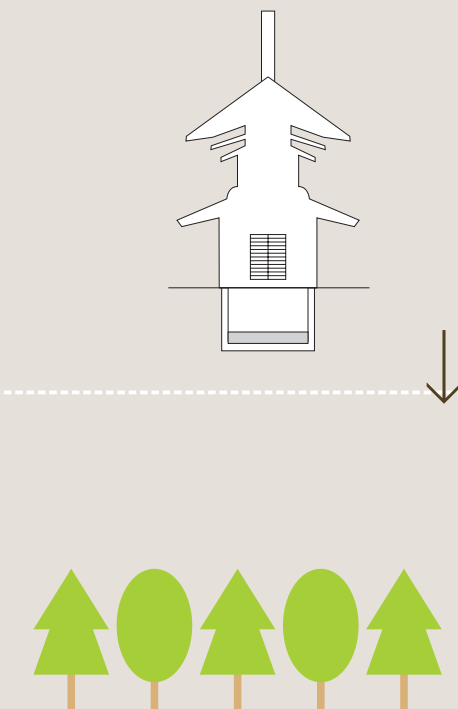
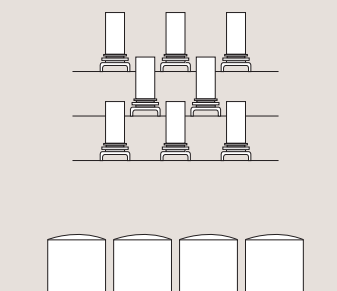
※但し、明年一月より東長寺檀信徒のご紹介に限りまして、お受付致します（実際のご納骨は、許可可後となります）。

※ご不明な点がございましたら、寺務長（手島）までお問い合わせ下さい。

千手堂



龍樹堂



祀り墓（地方寺院の樹林葬墓苑）

参り墓（東長寺文由閣内納骨堂）

平成27年
東長寺年分行持

1月	1日[木・祝]	年始法要・三朝祈祷
	18日[日]	修正会・新年会
	26日[月]	高祖降誕会
2月	8日[日]	大般若祈祷会
	15日[日]	釈尊涅槃会
	22日[日]	開山忌
3月	18日[水]～24日[火]	春彼岸会
	21日[土・祝]	春期彼岸会法要
4月	8日[水]	釈尊降誕会・花まつり
5月	26日[火]	山門大施食会・護持会総会
6月	14日[日]	観音供養祭
7月	13日[月]	盂蘭盆会法要
9月	20日[日]～26日[土]	秋彼岸会
	23日[水・祝]	秋期彼岸会法要
11月	21日[土]	太祖降誕会
12月	8日[火]	釈尊成道会
	28日[月]	懺悔会・もちつき
	31日[木]	歳末法要・除夜の鐘



曹洞宗 萬亀山 東長寺
160-0004 東京都新宿区四谷4-34
(代 表) 03-3341-9746
(縁の会) 03-3353-6874